日本学校教育学会 第39回研究大会（学会創設40周年記念）シンポジウム

（愛知東邦大学）

公開シンポジウム

公開シンポジウムのみの参加は、参加費無料

日時　２０２５年７月２６日（土）１５：５０～１７：５０

会場　愛知東邦大学　Ｂ１０１教室＋中継Ｂ１０３教室

【テーマ】

学校教育学のこれまでとこれから

～学校教育学のアイデンティティと未来展望～

趣　旨

1985年9月15日に創設された本学会の創設趣意書には、以下のことが記されていた。

「理論と実践の結合とは、（略）社会の構造分析と教育の組織構造・内容・方法分析とを組み合わせ、教育現実をよく『説明』『予知』する新理論の模索・創造を意味するものである。」これには「知」のパラダイム転換が含まれていて、「この課題への挑戦を十分に意識するのでなければ、本学会の存在意義はない」と宣言している。学校内外に生起する教育現実を捕捉・説明するに留まらず、未来の展望と地平を予知し、有用な理論と実践を本学会の日常的な学術活動を通して模索・創造することが、創設趣意書からうかがい知ることのできる本学会の使命と受けとめることができる。

このような使命を有する本学会であるが、わが国において「学校教育学」という専門分野はどれだけ認知されてきただろうか。教育行政学や教育方法学など、他の教育学系のジャンルにない「学校教育学」ならではの特質はどこにあるのだろうか。

学校教育は転換期を迎えている。コロナ期には長期にわたりオンライン授業が行われた。非対面型でも協働的な学びはやれたし、学生たちは、チャット機能を使った学習経験の交流・振り返りを楽しんでいたように映った。リアルな校舎や教室をもたないサイバー学校の普及は夢物語でなくなった。この仮想学習空間では、教師も児童生徒もアバター（仮想人格）で参加するかもしれない。きっとAIによる非人格的代替教師も普及するだろう。リアルな校舎、対面的な教え・学ぶという行為、人格的教師の存在がなくても、仮想的に学校は存続していけそうな地平がリアルに拓けてきた。しばらく前から2045年問題として、AIが人類の知能を超える技術的転換点＝シンギュラリティが指摘されているが、学校教育はどのくらい変貌するのだろうか。何を引き継ぎ残すべきなのだろうか。

本シンポジウムでは、これまでの学校教育学の歩みと痕跡を振り返るとともに、10年後の創設50周年への橋渡しとして、創設の趣旨に記された「教育現実をよく『説明』『予知』する新理論の模索・創造」するための、これからの学校教育の未来展望を参加者と共に探索したい。

＜コーディネーター＞

原田　信之（中部大学・第12期会長）

＜シンポジスト＞

多田　孝志（金沢学院大学・第8期会長）

佐々木幸寿（東京学芸大学・第10期会長）

安藤　知子（上越教育大学・第11期会長）

＜参加登録のお願い＞

公開シンポジウムのみの参加は無料ですが、QRコードのリンク先で、公開シンポジウム(無料)のチケットを入手して、ご登録をお願いします。

※Peatixを利用しています。

https://peatix.com/event/4367871/view

主催：日本学校教育学会 第39回研究大会(愛知東邦大学)準備委員会